



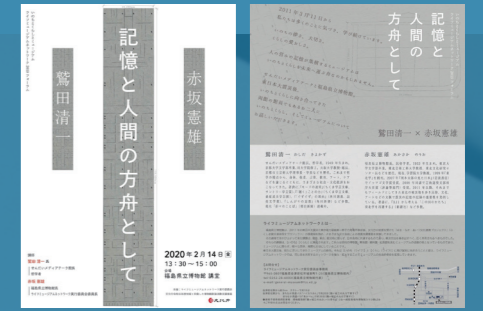
### 鷺田清一（わしだきよかず）

せんだいメディアテーク館長。哲学者。1949年生まれ。京都大学文学部卒業、同大学院修了。大阪大学教授・総長、京都市立芸術大学理事長・学長などを歴任。これまで哲学の視点から、身体、他者、言葉、教育、アート、ケアなどを論じるとともに、さまざまな社会・文化批評をおこなってきた。著書に、『モードの迷宮』（ちくま学芸文庫、サントリー学芸賞）、『「聴く」ことの力』（ちくま学芸文庫、桑原武夫学芸賞）、『「ぐずぐず」の理由』（角川選書、読売文学賞）、『しんがりの思想』（角川新書）など多数。現在「折々のことば」（朝日新聞）連載中。



### 赤坂憲雄（あかさかのりお）

福島県立博物館長。民俗学者。1953年生まれ。東京大学文学部卒業。東北芸術工科大学教授、東北文化研究センター長などを歴任。現在、学習院大学教授。1999年『東北学』を創刊。2007年『岡本太郎の見た日本』（岩波書店）でドゥマゴ文学賞受賞、2008年同書で芸術選奨文部科学大臣賞（評論等部門）受賞。2011年以降、それまでもフィールドとしてきた東北の被災地を歩き民俗、文化、アートなどの文脈で震災の記憶の記録の重要性を発信している。著書に、『3.11から考える「この国のかたち」-東北学を再建する』（新潮社）など多数。



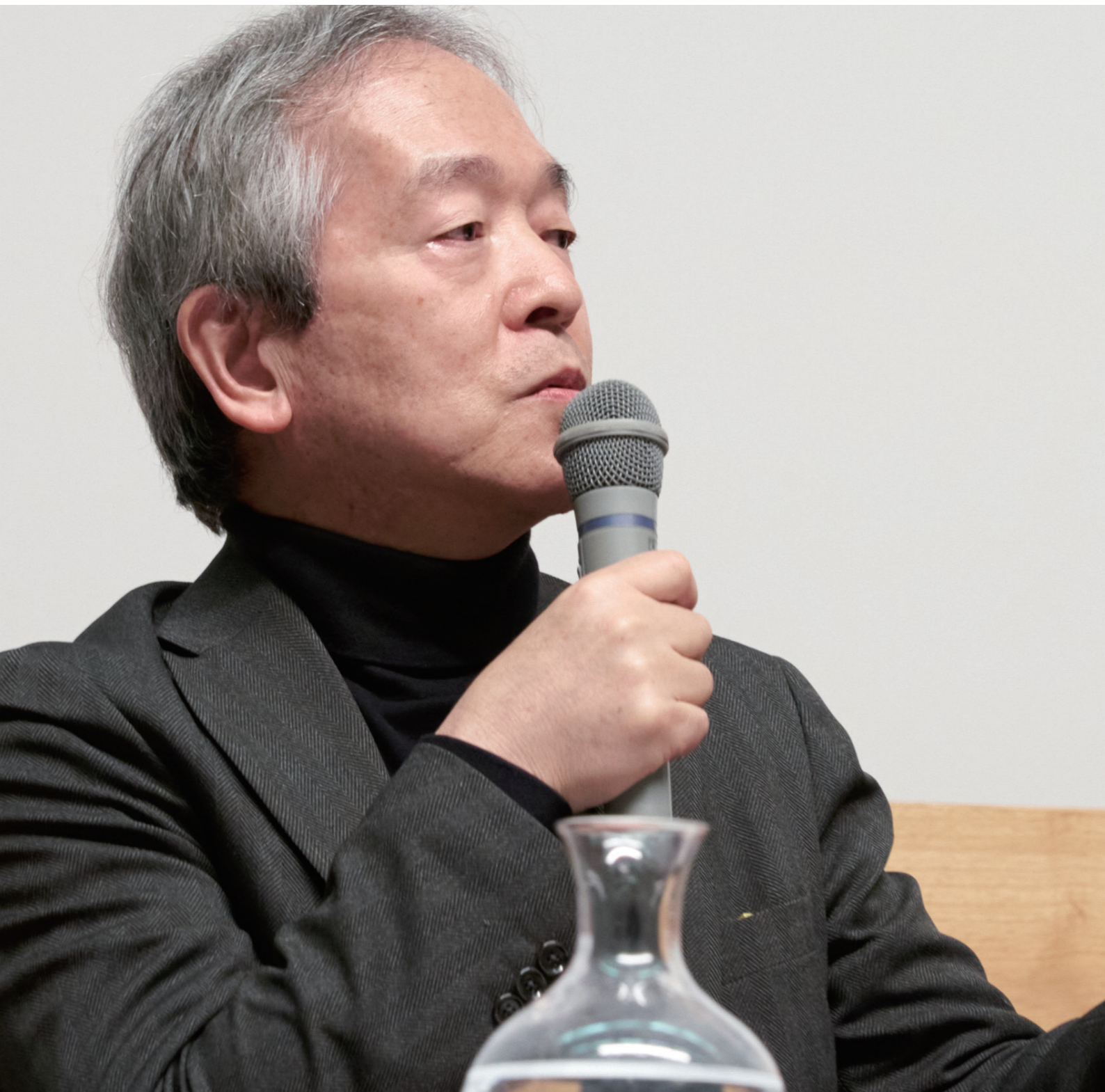
2011年3月11日から、私たちは多くのことに気づき、学び続けています。いのちの儚さ、大切さ。くらしの愛おしさ。人の営みの記憶が集積するミュージアムを、いのちとくらしを未来へ運ぶ舟ととらえ、せんだいメディアテークと福島県立博物館、東日本大震災後、いのちとくらしに向き合ってきた両館の館長でもあるお二人にいのちとくらし、そしてミュージアムについてお話しいただきました。

# いのちとくらしとミュージアム

## 記憶と人間の方舟として

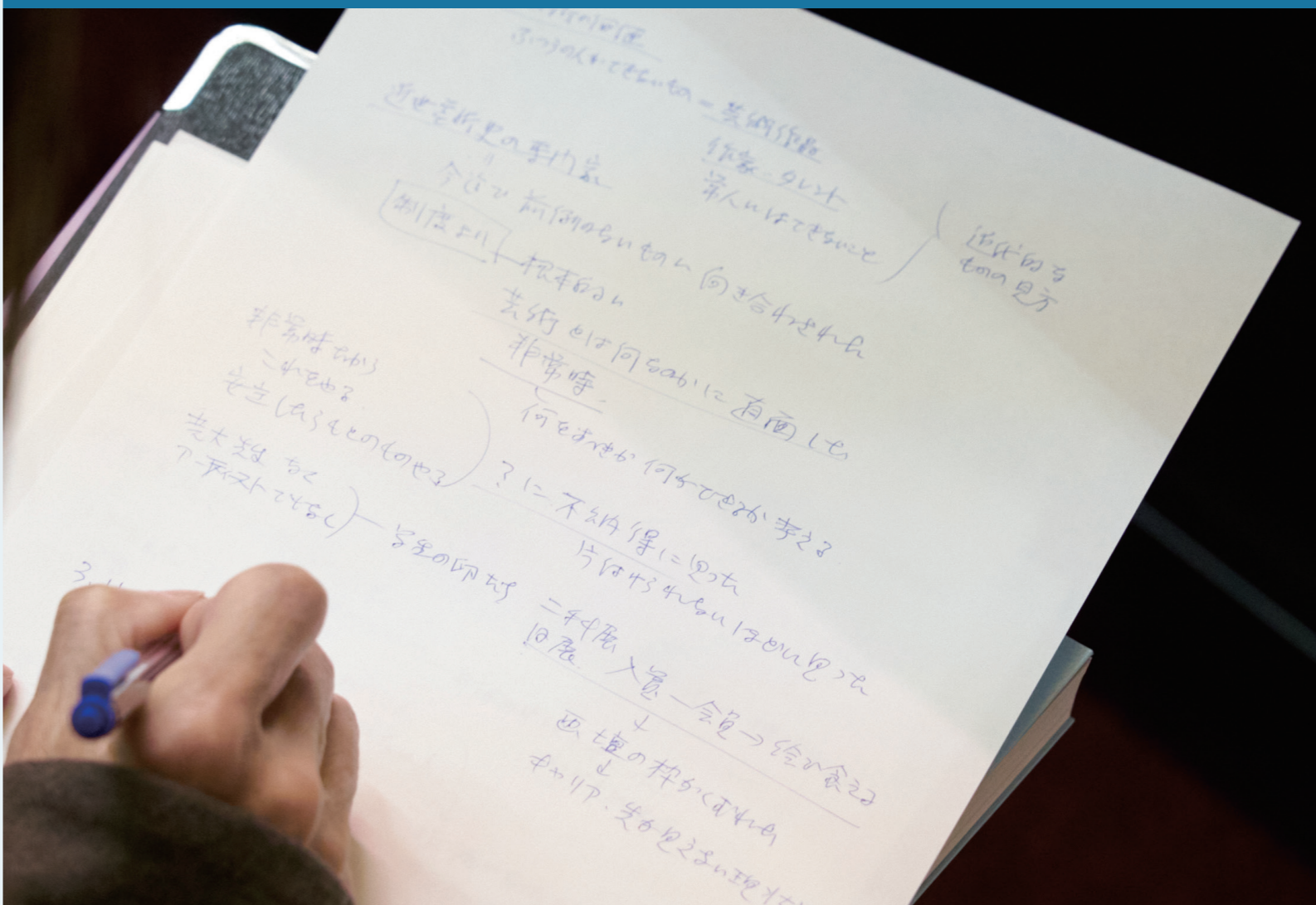
オープンディスカッション







日時：2月14日(金) 13:30～15:00  
 会場：福島県立博物館 講堂  
 講師：鷲田清一氏(せんだいメディアテーク館長/哲学者)  
 赤坂憲雄(福島県立博物館長/ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員長)  
 司会：小林めぐみ(福島県立博物館学芸員/ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局)



# いのちとくらしとミュージアム

フォーラム

記憶と人間の方舟として

**赤坂憲雄**  
 こんにちは。鷲田さんと対談をして本を作ったのは確か震災の年でした。

**鷲田清一**  
 はい。

**赤坂**  
 憔悴しきって、大きなリュックを背負って帰っていく僕の後ろ姿を鷲田さんが書いてくださった。僕は涙が出そうになりました。あの年はろくに寝ていなかったですね。毎日、毎日動き回って。本当に憔悴していました。

でも、あの時、鷲田さんとお話をさせていたでいて、自分がどこにいるのか、これから何をやっていくべきなのか頭の整理ができて本当に感謝しております。今日はこういう場においてお願いをして来ていただきました。それもまた感謝です。「ライフミュージアムネットワーク」ってどんな意味だかわかりますか。僕は聞いてもさっぱりわからなかった。いまだに理解しているのかどうか、わかんないです。

## ミュージアムは「記憶と人間の方舟」として立ち上がるとうとして

そこにいる川延さんだと思えます。今日の対談のタイトル「記憶と人間の方舟として」も僕、知らないんですよ、これ。こういうタイトルにするけどとかそういう相談、普段からまったくありません。ただ信頼関係ができていますので、ああいいなと思えます。今、ミュージアムがミュージアムなんです。今、ミュージアムは「記憶と人間の方舟」として立ち上がるとうとして

ミュージアムは「記憶と人間の方舟」として立ち上がるとうとして、そんな詩的なメッセージを感じています。そうだな、「記憶と人間の方舟」か。震災後われわれがやってきたことを思い返してみると、まさにそういうミュージアムの役割、使命といったものを震災後の9年間、様々な現場で確認しながら、ここまでたどり着いたという感じがある。こういう解釈は僕が勝手にするので、彼らは何を考えていたのか、ほんとに知らないんです。でも、そういういかげんな関係の中でわれわれはいろんなことをやってきました。

## 太郎さんは知っていた

僕は10分前に遠野からここに駆けつけてなんの打ち合わせもしていません。鷲田さんは「それでもいいよ」とおっしゃってくださいました。そういうことで進めていきます。ライフミュージアムネットワークはすごいなと思えました。「いのち」と「くらし」ですよ、ライフって。これは岡本太郎さんが大好きだった言葉です。「生活」とか「生命」という言葉が好きだった。まさにミュージアムのなすべき役割が「いのち」と「くらし」に関わるということを太郎さんは知っていたと思います。

## 権威的に拒んでいる施設

冗談を言っていると思われるかもしれないですが、こういうテーマを掲げて始めたことを、僕はまったく知らずに、面白そうだなと乗って、いろんなプロジェクトを展開する。ほんとにそういう仕組みでした。これも、ああ面白い

など思いました。

僕らはこの博物館で15年ぐらいいるんなことをやってきた。とりわけ、この数年間で気がついて始めたことの一つが、例えば博物館に子育てをしているお母さんたち、車いすの方たち、老人の施設にいる方たちに来てもらう。あるいは目の不自由な方に来ていただく。そういうことを手探りで始めています。そうすると、ミュージアムってというのが実はそうした様々な弱者にくくられる人たちに対して、口にはせずにとっても権威的に拒んでいる施設なのじゃないかという感覚がどうしても拭えないのです。

## 広場になるべきだとずっと思ってきました

せんだいメディアテークとは対照的だと思います。作られた時期が違うので当たり前のですが、伊東豊雄さんが作られたガラス張り、外に向けて開放的に開かれ、誰が来てもいい、「ここは語り、みんなの学びの広場なんだ」というメッセージが建物そのものからあふれ出している、そういうメディアテークと並べると、うちはやっぱり古いタイプ。30年ちょっと前に作られたので。あえて言ってしまうえば、とても権威的な建物施設。だから、この施設の中には市民の皆さんが自由に使える広場になるような部屋が何もありません。最初からなかった。だから、僕は広場になるべきだと思ってきました。

そういうことも含めて、われわれ自身が震災の体験を経て、ミュージアムって何なんだろう、どうあるべきだろうと考えるながらたどり着いたのがこのライフミュージアムネットワーク

ワーク。全国の色々な施設とどんどんつながろうということをやってきました。そのネットワークの中で初めて新しいミュージアムの姿が立ち上がってくるんじゃないかという夢のような思いを託している。これも僕が勝手に解釈しているだけです。

長々とおしゃべりしてしまいましたが、お久しぶりです。震災後のメディアテークとわれわれ福島県立博物館のなしてきたことを振り返りたいのですが、鷲田さんのリーダーシップでメディアテークは本当に色々なことを震災後にやられてきましたよね。われわれも震災遺産の展示をメディアテークでやらせていただいた。その時はクリスマスで、1週間、8、000人とか来場いただいて、全然違う施設、条件なんだなと思えました。

## 本当に非常事態でした

**鷲田**

何からお話ししましょうか。ちょっと昔話でもいいですか。2011年は私が大阪大学で総長をしていた最終年で8月の末までが任期でした。その任期の最後の年の卒業式のちょうど2週間前に震災がありました。あの時は西の離れた大学ですけど、本当に非常事態でした。翌日に後期日程の試験がありましたし、年度末にいろいろなことがある中で、大阪大学にも東北出身の学生がたくさんいたものですが、まずは彼らの安否を確認しないといけない。それから、卒業式をどうしたらいいのか。卒業式までに東北出身の子みんなと連絡が取れるかどうか、それぞれに当たりました。大学というところはすごく大きな組織で、教員、



ような所帯ですが、災害時とか何かあった時には大学が公共的に住民の方の避難場所になります。色々考えていますので、食材、トイレトベーパー、女性に必要なものとか備蓄があって、それを、お宅はどれぐらいあるのと関西の大学で連絡をしいました。どういうかたちで被災地にお届けしたいいか、そういうことも連絡しました。あの時には道がまだ復活していなかったで、物資が必要だということでしたが、みんな応援に行きたくても、しばらくは行かないほうがいいという状況でした。その代わり、できることといったら何か送ることあるいは少なくとも関西という人口の多い所で、物資が東北にちゃんと行くように、できるだけものは買わずに、スーパーを空っぽにしないようにすることでした。距離があって、すぐもどかしい思いがある中で、とにかく離れていても応援できることってなんだろうと考えていましたね。

こういう人たちの応援があったら絶対に皆さんの力になると思う人たちは、例えば漫画家の方、愛読者がいっぱいいらっしゃる小説家。しかし、大学や企業は支社や大学の連合が全国規模で、ぱっと連絡を取って動けるけど、作家さんとかアーティストはみんな個人プレーですから、みんなで組んで何かということが全然できない。そこで、私が関西の有名な作家さんとか、こんな人のお声が届いたらきっと皆さん力づけられるだろうという人に連絡を取りました。そして大きなチラシを作って、東北の避難所、行政に送って、これを貼り出してくださいというようなことをやりました。そのときわかったけど、作家さんって連絡取れないで

### 壁がなんにもないんです

で、メディアアテークは正反対で収蔵庫なんてごく僅かなのです。それから事務局もある意味ではないに等しいです。つまり、壁がなんにもないんです。もちろんおトイレやエレベーターには壁があるんですけども、それ以外には実質的にほとんど壁がなくて、事務局もドアもないし壁もなくて事務局の外で受験勉強している子とか、本を読んでいらっしゃる方とか、居眠りしている方とか、いろんな人との間の壁もないので、スタッフの仕事ぶりも丸見えです。逆に外の気配もわかる。

それから、てつがくカフェをやったり、民話を聞く会をやったり。学校でいうクラブ活動みたいなかたちで市民のいろんな文化活動があるんですけど、その間も壁がないので、お互い丸聞こえで、椅子も自由に並べ替えていただいたらいいたいというそういう施設。「モノ」と「場所」、すごく対照的です。壁がないのみならず、総ガラス張りですので外からも中の様子が丸見えという施設です。

### 震災後にやってきたことはものすごくよく似ている

そういう意味で対照的、一見対照的だけれども本当はちっとも変わらない。博物館は非常に貴重なものを大事に収蔵されているので見た目はクローズドに見える。そして、メディアアテークはガラス張りで壁がなくて、一見ものすごく開放的なあらゆる人に開かれた施設に見える。その建物の構造の違い以上に、一方はミュージアム、一方は文化施設、市民センター

すね(笑)。みんな、住所を隠していらっしゃる。赤坂  
そうですね。編集者を通してしかつながらない。

### 卒業式と入学式が本当につらかった

驚田

そうですね。連絡しても教えてもらえなかったり、そういう意外なことを知りました。それから大学職員にはプロフェッショナルの施設課の人がいる。文科省から被災地の大学への安全確保、当座の修復のために必要な緊急支援金があって、その申請書がものすごく煩瑣、難しく量がある。だから、まずうちの施設課の職員を送った。それから、また精神科の先生、災害ボランティアの先生におうかがいして、どういうペースで何日ぐらいが限界か、何を持って行つたらいいのか、色々なことを聞いた。とにかく3月からいろいろなことがあった。個人的には卒業式と入学式が本当につらかったです。まだ安否もわからない時に大学を卒業していく人たちにどう声をかければいいのか。それもある色々大変でしたが、とにかく無事に8月の任期が終えられた。

### 言葉が出なくて

そして、家の近くにある私立大学に引越した9月、まだ本とか荷物も引越しができないがらんだ研究室に、赤坂さんは来てくださいましたね。あれは2日間でしたか。ちょ

みたいなものですが、とりわけ震災後にやってきたことはものすごくよく似ていると思えました。

こちらは、被災地の色々な、保存するべきか、するべきでないかという価値を誰も決められない、むしろ未来の人たちが決める本当に大事なモノを収蔵されています。

それから、メディアアテークではモノは収蔵しないけれども、映像の記録、声の記録、いわゆる新聞社の公的な記録でも官公庁の公式文書でもなく、市民が自分の体験したこと、自分が見たもの、思ったものの映像の記録に関わってきた。

### いろんな人たちが寄り集まって何かを話し合う場

それからもう一つ、見かけよりも似ているのは、先ほどライブミュージアムネットワークのチラシやポスターを見せていただいたのですが、美術に詳しい方の講演を聞く、震災の問題について専門的に考えてきた人の解説を聞く、そういう一方通行ではなしに、僧侶の方もいらっしゃれば市民の方や、あるいは避難してきた方もアーティストもいらっしゃる。普通、こんな組み合わせで、自分たちのくらし、被災について語れる場ってなかなかありそうでない

うど沖縄か鹿児島に行かれる途中で、その直前は三陸にずっと行っておられた。大きなリュックを背負って入ってこられた時、やっぱりやつれていらした。お姿を見ていたら、最初は言葉がなかなか出なくてね。二人で向き合って何をしゃべろうか。

編集者の方も一緒にいらして、「二人で話を」と言われて、2日間はじっくり相当の時間お話ししたんですけど、これから東北に戻られるのかと思っていたら、鹿児島に行かれるという、その後ろ姿がなんかね、今も目に焼きついたままです。その後ろ姿に、どう声を、どんな声をかけたのか自分でも憶えていないです。その時は全然考えもしていなかったですけど、2年後に私はせんだいメディアアテークの館長として赴任することになりました。

### 博物館は「もの」なんです

そして、まさかまさか、こういうところで17年やってこられた県立博物館の館長VSですかアベックですか知りませんが、私がメディアアテークの館長としてお話しできる日が来るなんてほんとに想像もしていなかったです。

今日は初めて福島県立博物館に寄せていただき、見せていただいた。大きな施設です。お手入れもきちっとされて、もうびっくり仰天です。本当に対照的、二つの施設は対照的だなと思えました。まず、博物館は「モノ」なんです。 「モノ」をどういうふうに残し、そして活用していくか。そして、何より記憶を、公共の記憶、みなさんの記憶を大切に守っていく、育てていくという施設です。

んです。メディアアテークも日常的にそういうことをしてきましたが、実に博物館もいろんな人たちが寄り集まって何かを話し合う場をものすこくたくさんやってこられた。

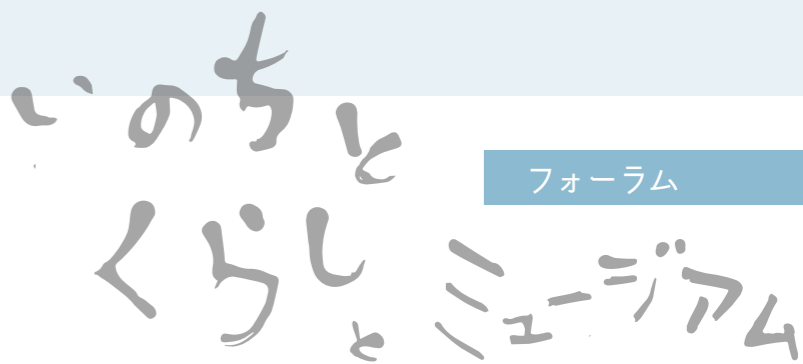
### 「てつがくカフェ」

よく言うんですが、メディアアテークで震災の少し前から75回ぐらいになりますか、ずっとやってきたものの一つに「てつがくカフェ」があります。それは、実は私が大阪大学にいた1990年代中頃に最初にやって、今では全国各地にでもありますが、ちょうどその当時大学院生だった人がご縁があって仙台の大学に勤めるようになって、彼が震災の直前から始めてくれていたんです。

普通、「てつがくカフェ」は集まって、その場で今日はなんの話をしましょうかと始めるんですけど、メディアアテークのは少し特殊で、ずっと被災ということの意味を考えると、そういうカフェをやってきたんです。被災というものすこく重いテーマを、震災直後からよくやりきったとびっくりします。それから、市民の方がまだ生活も色々不足するものがある段階で、そういう、みんなのディスカッションの場に出て来てくださったということ自体がすごいと思っっているのです。

### 「ほかにこんな場所はないから」

いつも「てつがくカフェ」が終わってからアンケートを自由に書いていただきます。ある時、ある一枚を見て本当にうれしかった。「ど



記憶と人間の方舟として

### 僕らの前にモデルはなかった

赤坂

少し福島県博が震災後にやってきたことを

うして今回「てつがくカフェ」に参加されたんですか」という質問に、「ほかにこんな場所はないから」と書いてあった。全然違う、お互いなんのつながりもない、年齢も関係なし、そこで、このテーマで話しましょうかといきなりずばっと始まる。しかも「てつがくカフェ」は自分の体験したことを具体的に話す。そして、お互いの体験を交換する中で、何が問題なんだろうってその問題を探していくという、そういうやり方をするものだから確かにないです。すよね。ありそうでないんです。

私たちは市民という言葉が簡単に使うけど、本当に市民が性別、年齢、立場とか全部外して、例えば原発の問題であっても、過疎の問題であっても、子どもたちの生活環境でも、そういうことについて、いきなり話をバツとする。そういう場は実は都市にほとんどありません。

しかも、そこでダイバートみたいに二つに分かれてやるのではなく、お互いが普段からとても言にくい、あるいは言ったらどんな反応がくるか怖いことでも、ぼそっと語れるような、そういう場を作るといのが大変難しいんですが、それを、ずっとやってきました。

そういう意味で、この2年間、福島県立博物館が一見クローズドに見える建物のこの場所です。やってらっしゃること、メディアアテークがやってきたことは実はものすこく近くにあるのだと思えました。



## 総合博物館

思い返ししながら、お話ししてみたいのですけれど、メディアアーツ同様、間違いなく、小さな広場、いろんな人たちの声が出会える場を作ることを一生懸命やってきたと思います。

こういう巨大な災害の時に、被災地の例えば博物館、美術館といった施設がどういう役割を担えるのか、たぶん僕らの前にモデルはなかった。だからこそ、震災直後からうちの学芸員スタッフは20人以上いるんですけど、彼ら一人一人が自分のやるべきことをどんどんやっていました。何を博物館のスタッフとしてやるべきなのかモデルがない以上、もう自分がそこに入っているやれることをやるしかないという状況だったと思います。

福島県博が、東北のミュージアム関係者から最近になって、「福島県博は総合博物館として自分たちの条件をとて勝手に、最大限に使って震災に対応したと思います」というふうに評価をいただく。とてもうれしいことです。何をしたいのか分らない時に、みんなが必死になってどんどん被災地に入って行って、ある者は文化財をレスキューというか運び出す。あるいは、ある者は、震災の記憶が宿っているがれきを一つ一つ掘り起こして、その聞き書きをして、許可を得て県博に持って来るということをずっとやっていた。そういうことは誰も教えてくれるわけでもなく、どこにも博物館の学芸員としてやるべき仕事として書かれていないのです。だから、「そんなことは俺らには関係ない」と言っていて、ここに閉じこもっていることもできたんですけど、本当に僕は頭が下がりました。みんなが一生懸命に出ていて本当にいろんなことをやりました。

総合博物館ということで、学芸員は自然、考古歴史、民俗、美術、保存といった、それぞれの専門性を背景に持った学芸員です。その人たちが一緒にあって震災の現場に行くと、これを震災遺産として残したいとか、いろんな専門性を持った学芸員たちが議論をしながら中で収集できるもの、コレクションとして残したいものを決める。おそらく初めての体験だったんじゃないかと思っています。

もう一つは、うちには美術の学芸員が何人かいて、彼らが震災以前から地域に入って文化とか芸術を仲立ちとして人と人をつなげていく、そういうことを模索していた。ですから、震災後に美術の学芸員たちが「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」とか、その前は、「会津・漆の芸術祭」をやっていました。そういう流れの中で、今はライフミュージアムネットワークというところにたどり着いている。

小さな語り合うことのできる場を、いろんなところに作っていくことによって、口にすることができずにいる思いとか、そうしたものを一つ一つ乗せていく。あるいは何気ない、本当に何気ないものでしかない落ち葉であったり、チラシであったり、そういうものを使っている飯館村の「いたてミュージアム」というものを作る。それは、震災の被害を受けた人たちにとつて、身近に転がっている何気ない落ち葉。なぜ落ち葉なのか。その落ち葉に、その人たちの震災の記憶が宿っていたりする。そういう、とっても繊細なことをいろんなかたちでやっています。

## 試されていたと思います

地域にある総合博物館としてのわれわれ県博は本当に試されていたと思います。地域で自分たちはいつか何ができるんだ。しんどい時に閉じこもっていたら、たぶん、われわれはこういう場所に出てくることできなかった。いろんな議論のぶつかり合いがあって、われわれがやっていることが全て社会的に認知されているかどうかかわからない。でも、それだけが信じてやってきたことは、僕は誇りを持って語れると感じています。

とにかく原発の事故から始まる被害は見えないですよ。見えないものをどういうふうに記憶として残すことができるのかは、たぶん誰も取り組んだことがなかったと思います。

## 問題が分散していく

鷺田

いろんなことを今の赤坂さんの話から思っただけですけど、一つは両館共に税金が投入された公共施設なんです。で、誰のためにということ考えた時、特に原発のこと、被災のことを考えるのはものすごく難しいし年を経るとに難しくなってくる。

なんと言えはいいの、災害直後は本当にみんなが同じような怖い目、つらい目、苦しい目にあって、一瞬、強烈な幻想のコミュニケーションができるのですが、その直後からどこで被災したかによって問題の質は違ってくる。そして、時間が経てば経つほど、例えば、補助金をもらえた方、もらえなかった方。あるいは郷里に戻れた、あるいは戻る可能性がみえてきた方

とまだ確定しない方。あるいは復職ができた人とできなかった人。それぞれがそれぞれの場所や想像もなかった難しい問題が新たにあらわれてくる。そして、抱え込んでいられるようになることで、みなさんの直面しているような問題がどんどん細分化してくる。あるいは対照的にこちらの問題がこちらでは全然問題になっていなかったり、逆であったりで問題が分散していく。しかもだんだん根が深くなっていくということがありました。

## 被災のかたちがものすごく複雑に

それから、次に世代の問題があります。9年にもなると、被災、震災の時にはまだ物心もついている幼児だった人が、もう中学生、高校生になってきていらっしやる。私も今回の震災で神戸のことを思い出してびっくりしたのですが、神戸の阪神・淡路大震災の時に幼児だった方が、ちょうど大学生ぐらいになっていて、本人は気づいていないのに3・11をテレビのニュース映像で見て、フラッシュバックと言ったんですか、自分が覚えていたことも全然知らないのに、体がパニック状態になってしまう。そういう大学生が結構いる。本人は全然記憶にないと思っただけで、本人はものすごく深いところに残っている恐怖、なにか訳がわからない不安が16年後に出てきたということもあるわけです。今回の3・11でも、ちょうどそのころ幼児だった人が中・高校生になっていきますから、今はどう思っているのか、それから、さらに震災後に生まれた世代がい

ろんなことを自分で判断できる年齢、小学校の

フォーラム  
いのちとくらしとミュージアム  
記憶と人間の方舟として

ライフミュージアムネットワーク 2019 フォーラム  
のちとくらしとミュージアム

# 記憶と人間の方舟として

鷺田清一



赤坂憲雄

高学年くらいになってきています。新たに移住してきた新しい住民もいて、被災のかたちがものすごく複雑に分岐していったのみならず、世代的にも直接の被害とはまた違うかたちの人たちが、同じ被災地で生きている人たちがいる。さらにこれから生まれて来る人たちも勘定に入れて、いろんな問題を考えたいかなければならない。ということで、市民のための施設と言いつつ、その都度、その都度、私たちが誰に向けて呼びかけ、来てくださいますかと言っているのか。これがものすごく複雑になっていく。

震災遺構を残すか、残さないかでも「忘れまい」と遺構のことをすごく大事にしようとする方、「とにかく忘れない。毎日思い出すのもつら過ぎる」と言う人もいらっしやる。さらにそこに新たに生まれた方にとってはまた全然違う意味を持つてくる。本当に公共的ということが難しくなっている。

みんなが生きていくためにきつと行政の方はいろんなことをやられるわけですから、公共施設というのは複雑になった時にこそ、本当の意味で立場を超えて、思いを超えて、みんながこの地域をどうするのかをディスカッションする場として必要になってくるということがまず一つ。今の私たちの悩みですけど、もう本当に思っている。これはまた後でゆっくりお話をしたらいいのかもしれない。

## もう一つの共通点はアート

もう一つの共通点はアートです。博物館はミュージアムですから当然です。メディアアーツも市民の社会活動、文化活動を支援する施設



で、特にアートを手法として、あるいは力としてうまく生かしつつ社会活動を支えるという施設です。どちらもアートの問題ですね。

アートは、これまでは音楽鑑賞、美術鑑賞、お茶を習うとかすごくプライベートなイメージがあったと思うんです。けれども、そういう個人のプライベートな鑑賞とか趣味じゃないに、アートが公共的ないろいろな課題の前でいったいどういことが可能なのかをアーティスト自身が震災後、真正面から受け止めるようになっていきます。アートの問題をどう考えるかも意見交換ができればいいなと思っています。

## アートって訳がわからない

赤坂

僕は先ほど、福島は見えないものとの戦いを強いられているという言い方をしました。起こっている出来事が人々の意識や色々なものを分断して引き裂いていて、なかなか隣にいる人とすら言葉を交わすことができない。それがとても厳しいかたちで当たり前に転がっている。それをどう超えていくことができるのかという時、アートが面白い役割を果たせると感じてきました。

アートって訳がわからない。何やってるんだか訳がわからないうちに人と人をつなげている。そういうことから始まって、もつと意識的に訳のわからなさを逆手に取って、隠されている見えない現実をむき出しにして見せる。本当はアートってとても暴力的なところがある。一つの答え、一つの解があるわけではない。その問いの中に誰しもが投げ込まれている状況

## アーティストの卵

スタッフはどう考えているかわかりませんが、私がメディアアテークはどうあるべきか考える時に一番勉強になったのは、藝大の先生でもなく、有名なアーティストでも有名な指揮者でもなく、アーティストの卵だった。大学生や、大学を出たてで将来の道筋も全然わからないような方たちです。

少し前の美術、あるいは音楽の世界は、キャリアアップの道がものすごく緻密に決まっています。美術の場合は昔だったら二科展とか日展に出して入選する。その次に奨励賞かなんかもらうと、ギャラリーとつながりができる。その次に会員になって、やっと絵で食べられるようになるというような階段があった。けど、今のアートは、一部の保守的画壇を除いて、そんなものはもうほとんど崩れているし、藝大に通う学生なんかほとんどそういうものとは無関係に活動している。ということは、キャリア、先が見えない非常に不安定な状態に20代、30代と置かれるんです。でも、その人たちが今回の震災で、特別に何か表現しようという意識なんか毛頭なくて、とにかく自分でもできることがあれば行くというかたちで、たくさん東北に入ってきた。

## 本気で問うていた

その人たちの必死な顔を見て、もちろんアーティストは全部脱いで、一人の人としてできることをしたいという意味もあるのは間違いないですが、もう一つ、彼らのなんと言うか

ではアートが果たす役割はとても大きいと感じてきました。

## どうしたらその声に耳を傾けることができるのだろう

その役割の中で、このライフミュージアムネットワークという小さな動きを彼らが作ってきた。社会の弱き人々、小さきものたち、どうしたらその声に耳を傾けることができるのだろうか。世の中がギスギスして善と悪の二元論で社会を分断していく力がものすごく強く働いている時に、そうではなく、もつと柔らかく他者弱きもの小さきものにつながっていく回路みたいなものを無数に作っていく。そういうゲリラ戦のようなものとしてもアートはあるのかなと感じてきました。それはまさに鷺田さんのお仕事。弱さの力とまさにつながると思うんですけれど、われわれはそれを学びながらやっています。

## ものすごく制度的

鷺田

9年前の震災は、アートにとってもアーティストにとってもものすごく大きかったと思います。メディアアテークもそうですし、福島の美術館、博物館もそうです。

ミュージアムの歴史はアレクサンドリアの時代からあるけれども、いわゆる現代の美術館、博物館は芸術作品という独特の文化的価値を持ったものがまずあって、そういうものを公

のつびきならぬ姿を見て、あの人たちは、自分がこれから関わりようとしている、やろうとしている芸術がどういう営みなのかということの本気で問うていた気がしました。

どういことかという、先ほど美術館、博物館や、画壇の話をしましたけれど、そういう制度自体も全部流れてしまったんじゃないか、それほどの文化的な事件、出来事であった。

## アートが復興の原点から立ち上がるんじゃないかな

つまり、彼らは必死で被災地で見ようとしていた。自分は色々なアート、彫刻、絵画、デザインを習ってきた。あらゆるものが奪われてゼロになっちゃったこの場所では、みんなが毎日の生活をこれから回復していかないとけない。その時に、もちろん食べるものも住まいも大事で、それと同じぐらいの重みを持って広い意味でのアートが復興の原点から立ち上がるんじゃないかな。自分たちがやっていることは結局最後まで飾りもの。世の中が安定している時にある制度に乗っかっているだけの営みだったら、不安定な生活であくせくしてまで必死でやることじゃない。もつと大事なことがあるんじゃないか。

## 食えること寝ること

## 同じ重さで

## 立ち上がらなかつたら

ゼロからもう一度生活が立ち上がる時にアート、歌と一緒に立ち上がらなかつたら、別に絵

共的に展示、保存、修復したりする場所だというイメージがあります。独創的、天才的な人が作った普通の人にはできないような非常に価値のある音楽作品とか美術作品、それに公共的に触れられる場所というイメージがありますが、それはものすごく制度的なんです。芸術作品はすごいタレントつまり才能を持った作家が作った常人にはとてもできないようなものであるというのは、一つの近代的な芸術の見方です。

## 戸惑いについて

先ほど赤坂さんが、今回の震災では、美術史の専門家とか修復の専門家、いろいろな専門家が今までにない問題に向き合わざるを得なかった、一つも前例がなかったという戸惑いについてお話しされたけれども、僕はそれがものすごく大事なことだと思っています。つまり、学芸員の人たちも美術館、博物館が乗っかっている制度よりもつと根本的な芸術ってなんなのかという問題に直面したと思うんです。

僕は、メディアアテークもこの非常時にあって、いったい何ができるのか、何をすべきなのか考えた時に、今、非常時ってまたま言いましてけれど、非常時だからやるけど、でも非常時でなくなり、安定した日常の生活ができるようになってきたらもとのアートの施設に戻るといいう方にすごく抵抗があります。だから、今もまだ震災後の色々な問題があって、メディアアテークがどう関わるかを考えています。それが済めば、もとのメディアアテークの本来の姿に戻るといいう言い方では片付けられないほど大きい問題だったと思うんです。

を描かなくても、例えば地図を描くにしても少しでもみんなが見てくれる、みんなの気持ちがあるような描き方があるということを発見する。人を弔うにも、ただ弔うだけじゃなしに歌う、あるいは花を手向ける。そういうことが、食えること寝ることと同じ重さで立ち上がらなかつたら、もう自分はこのままアーティストの道に進んだって意味がないんじゃないか、そういう、切羽詰まった問いがあったように僕は思うんです。そのまま住みついた人もたくさんいるんですが、彼らの姿を見て、ほんとに立派だなあと僕は思ったんです。

彼らの姿を見て、この社会で美術館、市民の文化施設というものが、まず経済とか福祉があって、文化とか芸術の支援は余裕があった分でのこのじゃなく、われわれ自身もアートの公共施設の意味を同じく突きつけられた。今回のことは私がアートの公共性ということを考える際の軸になったような気がします。

## 民俗学者がやるように

赤坂

確かに震災後、見えにくいかたちですけど、若い世代の人たちが相当移り住んでいますね。アーティストだけではなくて、被災地の色々なところに入り込んで、新聞記者をやっている女性が辞めてしまったり、その地域の森林関係の仕事に入っていたとか。東日本大震災というのは大きな裂け目であり、われわれに新しい種をたくさんまいてくれているという感覚がありますね。例えば、陸前高田に移り住んだ瀬尾さんと小森さんという二人も藝大

フォーラム

いのちとくらしとミュージアム

記憶と人間の方舟として

の学生でした。二人は陸前高田に通っているうちに、住んでみようと思っ住んで、そこで働きながら被災した人たちを訪ねて話を聞き書きしていますね。民俗学者がやるようにメモを取ったり、スケッチしたり。そういうことから自分たちのアーティストとしてのアイデンティティーを模索していたんだと思います。彼女らは今は仙台に住んで、被災地から立ち上がってくる民話の芽のようなものをつかんでみたり、とても繊細ないい仕事をしています。アーティストに限らず、様々な若い世代の人たちが、生きている根源のところを揺さぶられて、被災地へ東北へやってきて、そこでもう一つの自分の生き方を探し始めている姿をたくさん見ました。

## 明らかに変わったなと感じる瞬間がある

東日本大震災による無残な傷痕のような風景に身を置くことで、これから何十年も生きていかなくはないけない彼らは、自分が何を感じ、何を考えるのかという追い詰められた状況で色々なものを発見していますよね。

僕は、今の30代のとりわけ女性たちに色々なところで出会います。明らかに変わったなと感じる瞬間があるんです。あの世代って就職氷河期でロスジェネと言われる世代でもある。そうすると、とりわけ彼女たち、女性たちがほんとに見切っているんです。大きな組織に所属してお金をたくさんもらってとかそういうことにほとんど関心を持たなくて、むしろ過疎に苦しんでいる地域で自分に何がやれるだろうかみたいなきことを実に冷静に考えている。



大学院を出て海外に何年かいて帰ってきたような優れた女性たちが、そういう道をあえて選択し始めている。その中でアーティストはある意味目立つ存在だと思います。

## 一からもう一度

震災の直後を思い出しますね。当時、僕は東北芸術工科大学にいて震災の2ヶ月前に大学を辞めているんですけど、その頃につき合っていた若者たちがたくさんいるので、色々なことが聞こえてきた。家族をほとんど失ってしまった女性もメディアアーツで展示をしていました。電話が置いてあるんですよ。おばあちゃんの声だったかな、その受話器から聞かせるような作品があった。とにかく、あの震災を経て、生き方を根拠から変えざるを得なかった。多くの復興と称されるものがどんどん進んでいったからといって、戻る場所があるわけじゃない。アートという制度が、そこに生き残っているわけでもなく、鷺田さんが言われたように、一からもう一度作り直さなくてはいけない。でも、それはとても面白い刺激的なことなんだって、僕は時々あえて言うことにしています。

鷺田

民俗学者だから、特にわかっていただけだと思うんですけど、現代の若いアーティストって民俗学にもすく近い。お祭りとかお葬式、ああいうものにもすく関心を持っていますよね。

## がれきの中から蘇ってくる姿を

## 基本の姿を

鷺田

生け花って、よく考えたらひどい、ひどいと言ったら怒られますが暴力的ですよ。まず、枝を切ってくるしね。そして余分な枝はほとんど剥ぎ取る、鉢で葉っぱも取って、最後は花だけよろっと残して。ようこんな残酷なこと、生け花って生かすいうより「殺し花」違うかなって思うぐらい(笑)。

でもね、ふと気がつく。あつ、これ、自分たちが毎日やっていることと一緒にだつて。だって僕は牛とか豚でも野菜でも大事に大事に育てて、食べる話になったら殺して、おいしいね、元気の素だねとか言っている。

僕は、ほんとに他のいのちを、いい加減にじゃなく大事に育てて、でもそれをいただいて生き延びている。その生きるということの基本の姿をものすく象徴的に見せてくれているような感じがする。

もう一つだけ、なぜアートなのかということについての話をさせてほしいんです。僕は思うんですけどね、アートっていうのは小中義務教育の根幹にないといけないと思います。究極的には国語とアート、あと家庭科、義務教育にはこの三つがあればいい。

赤坂

それが、今つぶされようとしている。

## アートは市民教育の最高のメソッド

鷺田

赤坂

今、お祭りが出ましたけど、とりわけ震災の年の夏、僕は被災地をずっと歩いていて、祭りとかお地藏さんとか民俗的なものがどんだんがれきの中から蘇ってくる姿を見ました。お盆の季節に高台から見ると、津波で流された被災地に花が見える。色のある花が。今そこで人が亡くなったみたい。僕は手を合わせることもできなかったですけど。

そういう現場で、僕は片桐功敦という大阪からやってきた華道家に出会う。「はま・なか・あいつ文化連携プロジェクト」で招いて出会った。片桐さんは堺の華道家の息子さんです。言っているの、御巢鷹の日航機あの事故でお父さんを亡くしている。彼は東日本大震災のニュースを見ながら、もう居ても立ってもいられなくて福島に入るんです。結局8ヶ月ぐらい南相馬市で暮らした。何をやってたかと言うと20km圏内にも人に頼んで入って、被災地のたくさんの方が亡くなった場所に立って、野の花を採って来て生ける。それを写真に収めるということをやっています。

鷺田

花を牛の頭に挿したあれも。

赤坂

あれもそうだし、縄文土器に挿したり、津波で流されて土砂が入っちゃっている自動車の中に野の花を生けて撮ったり、浜辺に花を撒いて亡くなった人たちの霊を慰めるといったことを彼はやっていた。彼と出会って、花を

生けるって何だろうという問いが僕の中に生まれた。埋めるのも生けるだし、生けるっていうのは生贄のようにいのちを生かしておくみたいなこと。これは西郷信綱とか国文学者が言っているんですけど、生けるという言葉はつながっている。

鷺田

お酒でも、これいけるって言う(笑)。

## 新しいアートの世界、アートの風景が確実に生まれている

赤坂

言いますね(笑)。

片桐さんと話をしている、花を生けるって鎮魂だと僕は感じました。生きている野の花のいのちをいただいて、それが枯れる前に生ける。生と死の境目のようなところ、たくさんの方が犠牲になった施設に置き去りにされていたハイヒールに挿したり、そういう一つ一つの供養、鎮魂に花を生けるというアーティストとしてのアイデンティティーを問い返す、その核になるような出来事があると彼は感じたのだと思います。僕は、そういうふうに彼に文章を送りました。おそらく被災地に入って、様々なアーティストたちが、出会いや提案、打ちのめされるような体験をしています。そこで新しいアートの世界、アートの風景が確実に生まれていると思います。

## 生きるということの

たら、そもそも捕れないじゃないですか。だから人々はね、向こうに目標を設定して、今やることを決める、そういう生き方はしてこなかったんです。介護だってそうです、介護だって目標はないですもん。子育てだって、子どもってどうなるかわからないけど、しっかりとしてほしいということだけで、目標ってないんですよ。

## 目標なしに熱く活動できるもの

そうすると、目標なしに熱く活動できるものって唯一、アートなんです。作曲家は、最終でどんな曲になるか全然わからないままスタートするでしょう。なんか、元気になる曲作りたいたくならいしかなんです。絵でも、最後はこんな絵になるって、画家の頭にはないですよ。何を自分は描こうとしているのかすらわからないけど、なんかヒュッと一本線を戯れに引くと、うわっ、ここのカーブ気持ちいいとか、そういう中でだんだん自分がしたいことが見えてくる。

## 目標なしで、青写真なしで

社会活動もおんなじことです。先ほど震災後にみんなの抱える問題が分断、細分化されてきたって言いましてけど、でも、みんなで共通の目標なんか持てるはずがない。共通の目標とか青写真がないまま、でもみんなそれぞれの問題を抱えて、この街をどういうふうにしていってほしいかな、くらしをどうしたいかなって考える。目標なしで、青写真なしでも、みんなで一緒にハッピーになれる

フォーラム

いのちとくらしとミュージアム

記憶と人間の方舟として

ように頑張ろうねぐらいの気持ちでやっていく。最後に画家も音楽家も何か作品ができてしまおうと、もうこれは、どこも変更不可能ならい必然的な作品ができています。それが一つです。

## あり合わせのもので作る

それからもう一つ、技が要るんです。アートでもともと技という意味ですから、技術なんです。アートはギリシャ語のテクネー (techné) という言葉のラテン語訳です。テクネーって、テクニクとかテクノロジのテク、技術、技ということ。

現代の技術においては、さっきと一緒に青写真があつて、こういう装置、部品のためにはどんな材料、技術が最適かと聞いてくる。けれども、アートの技というのは、そういう目標があつて、そのためにはこれで行くという道具じゃなくて、あり合わせのもので作るんです。特に現代アートはそうです。被災地に転がっているもので。みんなお金がないから。お金がないのもあるんですけど、取りあえず身の周りにあるもので、アフリカの人がレンコンみたいなもので楽器や鍋を作るように、ブリコラージュって言うんですけど、要するに手元にあるもので工夫して、本来の用途とは全然違う、でもどうしても今必要なものを作る。その技術に長けているんです。今日の「震災遺産を考える」展覧会でもありましたね、フロッタージュ、なんにもお金かかってない、チョークと紙があればできるわけですから。

私の知り合いのアーティストは、被災地がれきや泥をビニール袋に入れて片付ける時でも、



これ聞いた話ですけど、普通は順番に積むのに、象のかたちにしたり、ピラミッドにしたりする。被災直後なのに、作業している住民の方たちが来て、「なんや、これ」って、で、ニタツとしてしまふんですよ。そういうことにも長けている。だからアーティストは技術を疎かにしない。ものすごく技術を大切にする。いい加減な仕事をしているとカチンとくる。それがすごい。

## 一人一人は 全然違う存在なんだ

最後にこれ、次回ゲストの北川フラムさんの言葉ですけど、アーティストのすごいところは、アーティストは「人と違っていて褒められこそすれ、絶対けなされない。人とおんなじが一番だめなのがアート」だということです。こんなすごい価値観はないとおっしゃっているけど、まさにそうなんです。みんなと違っていたらすごいということなんです。多様性の社会とかなんとか言われるけど、要するに一人一人は全然違う存在なんだということ、そのことを面白い、楽しいと感じる感受性がある。そういうふうと考えたら、これからの子どもの公民教育、社会教育、一人の市民としてきちんと外で育っていくために、アーティストのやり方は一番適しているんです。お説教じゃない。道徳の時間なんか要らない(笑)。

真面目に、あるもので丁寧に、そしてみんな違う思いを抱いていても一緒にやれる。そういう、なんと言うかセンスを育ててくれるのがアートだと思っっているんです。だからアートは大事ななんです。

ているわけですよ。あ、これだと思いました。

そこで僕は固く密かに決意したんです。これからは数字なんて僕にはいらぬ。

**鷺田**  
ポエムで(笑)。

**赤坂**  
見えないもののために生きる詩人になろうと思いました(笑)。

**鷺田**  
赤坂さんの「ご専門で僕が横から言うのおかしいけど、柳田國男が1929年の段階で農業危ないと書いている。

**赤坂**  
昭和4年ですよ。

**鷺田**  
「自然に反した単純化」と書いていて、昔はお米を作る所で豆も野菜も作ったし、養鶏もやってたし、茶畑も手伝いに行ったり、色々なことをやっていた。それが効率っていうものを大事に考えるようになると、ここは全部お米の田んぼに、ここは小豆の栽培にと、土地を一つの品目に単純化していった。それでは絶対その地域は滅びるということ。

**赤坂**  
モノカルチャーですよ。

## いのちに関わるものは 金がかからない

で、国語は、要するに僕らの人生って絶えず語り直して、色々なものを人生の途中で失っていくけど、何か大事な、例えば人を失う、体がだめになるとか、あるいは、すごい人と出会ってしまつて、人生もう一回ちゃんにしてゼロから語り直さないといけないときに、一番道具になるのが国語、言葉です。言葉と語らい。

**赤坂**  
つい最近、落ち葉で動物を作っている、あのグループでしたか作家さんの作品を見ました。僕も実は落ち葉を拾う癖がありまして(笑)。はかないんだよね、落ち葉って。

**鷺田**  
きれいなんですよ、それが。

**赤坂**  
そう、気になってしまつて。それを使って繊細な動物を作る若い作家がいるんです。すごい親近感を覚えて、いいなと思つて、一つもつてきました。とても共感するお話でした。

思い出したんです。震災の年に政府の復興構想会議の委員をやっていたもので経済同友会かなんかから講演を頼まれた。僕は、有名な企業の社長さんたちの前で、一生懸命、原発はだめだから再生可能エネルギーを地域で展開していきたいって話をしたんです。いつも一生懸命なんです。終わったら、シーンと静まり返つていて感触悪い、冷ややかなんです。司会の方が「どなたか質問は、誰も手を挙げなくて、仕方ないというように誰もが名前を知っている有名企業の社長さんがマイクを持って、「先生のお話には一度も数字が出てきませんで

**鷺田**  
そうそう。柳田はそう言うんです。読んだ時に、へえ、現代を予言しているなって思いました。

つまりお金が要らない。色々なものを一緒に作っている、うちたくさんできたからつて、お互いにお金が必要ない。色々なものを一緒に作っていると、お金の必要ないじゃないか。必要ない生活物資は流通産業、流通資本に頼るしかなくなる。ものを買わないといけない。ということはお金を稼がないといけない。

でも、これは周防大島の人が書いていらしたんだけど、本来、いのちに関わるものは金がかからないつて。つまり子育てとか、介護とか、食べ物とか。

**赤坂**  
地方ではね。

**鷺田**  
地方ではそんなに金がかからない。お互い助け合っているとつて言っている。柳田國男は見えないですけど、流通産業でものを買わざるを得なくなり、そのためにお勤めしないといけなくなった。次に、それが巨大グローバル市場になってくると、例えば、日本のトウモロコシは、アメリカに完全に負けてしまう。畑を放棄して次に何をするかという巨大企業の部品工場になったり原発になったり。そういうふうにして結局その地域は消えていく。その後半は、彼は書いていないですけどね。柳田はやつぱりすごいですね。

**赤坂**  
その『都市と農村』という本が今頃になつ

した。ポエムで「ございますね」つて褒めてくださつた(笑)。そう僕は受け取ることにしたんです。つまり数字というのは目標の世界です。

**鷺田**  
原発ゼロつておっしゃつた(笑)。ゼロは数字の原点。

## みんなでシェアする

**赤坂**  
あ、その数字もきつと出ていなかった。もうとっても驚いたように「先生のお話には一度も数字が」つて、確かに数字つて出てこないよなと思ながら、僕はその言葉がずっと心に残っている。会津で再エネとか自然エネルギーをみんなで作ろうと会社が立ち上がりました。そうそう、その社長さんが言つた。「残念ながら再エネは雇用を生みません」。ああ、そうなのか、数字に弱いから気がつかなかったと思つた。その1、2年後にその言葉をもう一度思い出した時、僕の周りで再エネの動きが始まつていて、会社を作つたりして10人、20人の若者の雇用が生まれていきました。雇用というのは、誰かがそこで生まれた富を独占したり、どこかに内部留保したりするものじゃないんです。小さな利益が上がつたら、それをそこに集まっている人たちがみんなでシェアする。つまりビジネスモデルが違うんだと思ひました。

あの人たちのビジネスモデルでは吸い上げた利益を全部東京の会社を持つていく。雇用なんて生みたくない。でも、会津で始まつた動きは、そこで生まれたささやかな利益をみんなでシェアする。20人ぐらいの雇用が生まれ

て蘇ってきますね。あそこに予言のように語られていたことが、われわれの今を照らし出してくれている。つまり村には相互扶助の見えないシステムが張り巡らされていたつて言い方をしている。

**鷺田**  
なるほど。

## 当たり前の顔をして みんな必要なだけ

**赤坂**  
そういえばそうだなつて思ひます。いろんなことを思ひ出してしまつて、もう時間がないのでですけど、日本海のある漁村でおばあちゃんからこんな話を聞いたんです。未亡人とか、老人しかいない家族、子どもがたくさんいる家族、そういう家族が水揚げの時に市場に行くとか、どんどん魚を落とすんだつて。その魚は頭を下げる必要もなく当たり前の顔をしてみんな必要なだけ持つてきた籠に入れて持つて帰つていい。そういうシステムがありました。そんなことをずつとやつていましたつて聞か

# いのちとくらして ミュージアム

記憶と人間の方舟として

された。地域社会というものが持っている内発的な力みたいなものをこの時代にもう一度、それが柳田が教えてくれていることかもしれないです。きつとそういうのつてアートとも親和性がすごく強い気がしますね。

## 広場のような場所になれば

ミュージアムが何かという問いを、ずつと突きつけられてきたと思ひます。方舟とは人類が巨大な災害の中で滅亡していく時に浮かんでいるあの方舟だと思ひますけど、そこに記憶というものを積んで生き延びようとする人間たちが、さまざまに見える知恵とか、アート、言葉を積んで、そして漂流していくようなイメージを僕は思ひ浮かべました。

ミュージアムのこれからの役割というのは、そういう見えない記憶、見えないものをきちんと蓄え収集し、それらが語りかけてくれる言葉、記憶、そうしたものを大事につないでいく、そういう広場のような場所になればいいなと僕は思つています。ミュージアム、ここが記憶と人間の方舟として、これからの時代を生かされていくというふうには、僕は受け取りました。いい言葉だな。

最後に鷺田さんにまとめていただいて終わりにします。

## どれだけ 色々なタイプの人を



## 包み込めるか

鷺田

広場っていう言葉、いいですね。今日のお話で心震えたのは魚を落とす話です。あと広場。広場と魚を結びつけるとですね、ミュージアムあるいは一般の公共施設がほんとの広場になれるその条件はどれだけ色々なタイプの人を包み込めるかだと思います。この条件で、昔だったら納税額なんぼ以上だったら選挙権与えるとか、色々あったじゃないですか、こっからは生活保護みたいな。そうじゃないに、どれだけ違う人、違うタイプの人を抱擁できるかがその広場の力だと思います。

それからもう一つ、広場は自由な場所でないといけない。入場者制限があつて、はい満席になりました、ガチャではだめです。広場というのは、入れるだけ入れないといけないし、いつ来てもいいし、いつ出て行ってもいい場所です。退屈だったら、こんな集會出て行ったらいい。

## リベラリティー (liberality)

私はヨーロッパの勉強をしていたのに、50代になって発見してものすごい恥ずかしかったんですけど、リベラルという言葉、第1番目の意味は自由じゃなかった。リベラルという言葉の意味は多くの辞書で最初に「気前がよい」と書いてあります。2番目が「寛大」、3番目が「たっぷり、豊富」。4番目に初めて「自由主義の」という言葉が出てくる。

名詞にしたらくわかる。僕らは、自由と言うとリベラティーと考えるけど、それは4番目

の意味を名詞にしたリベラティー。でも1、2、3番の意味、気前がいい、寛大・寛容、それからたっぷりあるを名詞にするリベラリティー。だから広場はリベラリティー (liberality)、リベラティー以上にリベラリティーの場でないといけない。リベラルアーツ (liberal arts) 教養つて、そういうことなんです。

そう考えると、その漁村は気前いいじゃないですか。魚を施すのではなく知らんぷりして、バアッとわざと散らして、で当然のようにもらって帰る。そこにほんとの自由の、気前のよさのという意味での自由の技法が、その漁師さんたちに生きられているという感じがした。こじつけでもないですよ。

赤坂

違いますよ。

鷺田

いいヒントをもらいました。ありがとうございます。

赤坂

というわけで時間は過ぎていきますから、このあたりでお開きとさせていただきます。ああ、鷺田さんに会えてよかった。おつき合いただきましてありがとうございます。



いのちと  
くらしとミュージアム

フォーラム

記憶と人間の方舟として